



# 秋田市まちなか 3.0

臼木 智昭

(秋田大学教育文化学部教授)

- 秋田市の商業地は32年ぶりに上昇に転じるなど、秋田市まちなかでの賑わいの創出に向けた取り組みの成果が現れてきた。
- 秋田市まちなかには文化施設が集積しており、それらの連携により賑わいの創出と経済効果の拡大が期待できる。
- 市民の意識と行動は、ポスト・コロナの局面に移行しており、賑わい創出では新しい局面を意識した取り組み【秋田市まちなか3.0】が求められている。

## 1 秋田市まちなか「再起」

2024年3月に公表された公示地価によれば、秋田市の商業地は32年ぶりに上昇に転じた。バブル経済が崩壊して以降、地価の低迷に象徴されるように、秋田県では経済の低迷と賑わいの「喪失」に苛まれてきた。

とりわけJR秋田駅西口から西へと伸びる秋田市の「まちなか」では、往時の人混みが失われたと言われて久しいが、賑わいの「創出」に向けた取り組みの成果がここにきて現れてきたと考えられる。

そこで、これまでの秋田市における中心市街地活性化の取り組みを振り返り、その成果と課題を考えてみたい。

賑わい創出に向けた取り組みの端緒となったのは、「秋田市中心市街地活性化基本計画（第1期計画、2008～2014年）」であり、2012年オープンの「エリアなかいち」に代表される、まちなかエリアの再開発事業であろう。

計画期間中には、「秋田県立美術館」や「にぎわい交流館AU」などのランドマークが整備され、中心市街地への都市機能回帰の契機となった。なかでもAUと県立美術館に隣接する「にぎわい広場」は、なかいちを象徴する大きな広

場であり、多様なイベントが開催される会場として、年間を通じてまちなかへの来訪を促す役割を果たしている。

その後、千秋公園においてハード整備が進められ、2021年には「秋田市文化創造館」（旧県立美術館）、2022年に「あきた芸術劇場ミルハス」（旧県民会館）が相次いでオープンした。

特に大規模集客施設のミルハスは、開館後は80%を超える稼働率で、想定を上回る35万人が来場し、まちなかへの人流の増加と滞留時間の拡大に貢献している。

さらに2024年6月末に「千秋美術館」がリニューアルオープンされたほか、7月に「お堀の遊歩道」が整備され、2025年には佐竹資料館のリニューアルオープンも予定されている。

これら一連の事業により、JR秋田駅西口から駅前広場（芝生広場）、仲小路、なかいちを経て千秋公園への導線が確立し、秋田市のまちなかが「再起」するための基盤は整ったと言える。

## 2 賑わいはどの程度回復したのか？

一方、国内各地では、コロナ禍を経て賑わいが回復しつつある。秋田県内でも、昨夏から祭り、花火大会、伝統行事など、集客力の高い多

くのイベントが制限無しで復活している。クルーズ船の運航も再開され、2024年には秋田港へ27回の寄港が予定されており、外国人観光客を含めて、まちなかへの誘客の拡大が期待されている。

そこで、近年の秋田市まちなかにおける賑わいの状況について、人流の面から振り返ってみたい。

秋田市では、毎年7月下旬の平日と休日の各1日における中心市街地の歩行者・自転車の通行量を調査している。調査地点はJR秋田駅から大町に至る12箇所で、毎年同じ場所で計測していることから、秋田市まちなかにおける人流の状況を把握することができる（図表1）。

調査結果によれば、2012年には約3.6万人だった休日の通行量は、2013年には4.6万人へと急増している。これは、なかいちのオープンによる効果が現れていると考えられる。

その後3.0万人台で安定していたが、コロナ禍により中心市街地での通行量は減少し、2020年に2.3万人、2021年には2.0万人（2013年の約4割に相当）にまで落ち込んだ。その後、コ

ロナ禍が沈静化した2023年には通行量が2.8万人へと増加し、人出は回復しつつある。

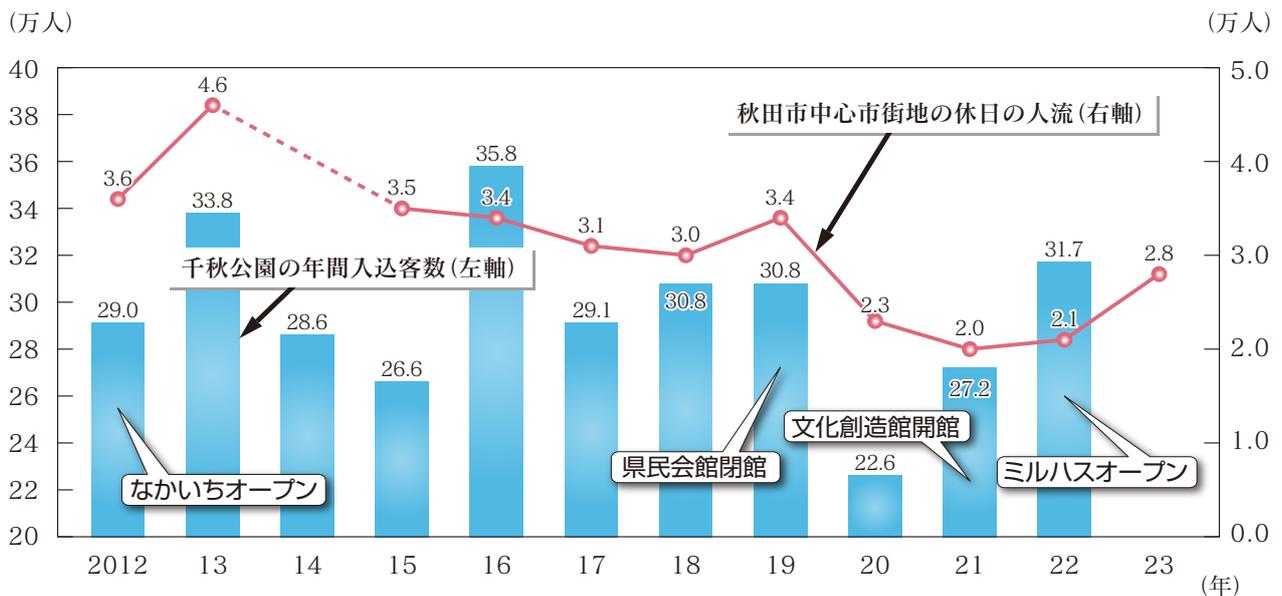
この点について、年間を通じてどの程度の人出があるのかを確認するため、秋田市まちなかを象徴する場所である「千秋公園」の入込客数をみてみよう（図表1）。

なかいちがオープンした翌年の2013年には33.8万人の入込客数が確認できる。一時的に2015年に26.6万人まで減少したものの、2016年には35.8万人となっている。その後は30万人前後の入込客数で推移していたが、コロナ禍により2020年には22.6万人にまで急減した。コロナ禍が沈静化した2021年に27.2万人、2022年には31.7万人へと回復に転じており、この傾向が継続しているものと予想されることから、ミルハスの開業効果が現れる2023年の調査結果の公表が待たれるところである。

このように統計からは、コロナ禍による秋田市まちなかの賑わい喪失とそのダメージは深刻であったと考えられる。

参考までに、秋田県全体の観光入込客数の推移をみると、2019年に3,527万人であったのに

図表1 秋田市中心市街地の人流の推移



(出典) 秋田市「歩行者・自転車通行量の推移」、秋田県観光統計

(注) 秋田市中心市街地の休日の人流：調査日（2014年を除く毎年7月下旬の休日）における中心市街地12地点の通行量の合計

対し、2020年には1,836万人とほぼ半減している。この急減は、行祭事・イベントの中止による影響が大きい(秋田県観光統計)。

コロナ禍での教訓として、まちなかの賑わい創出をイベントにばかり頼ると、大きなリスクを生むことを学んだと言えよう。イベントには大きな集客力があり、まちなかへの「呼び水」としての役割は小さくないが、その効果は一過性であることを忘れてはならない。

そう考えれば、秋田市におけるまちなかでの賑わいを常態化するには、絶えず人流を呼び込む仕掛けが必要である。

幸い秋田市まちなかへの人流は、コロナ禍で一時的な落ち込みはあるものの、ポスト・コロナの局面では早期の回復が見込める状況にある。この背景には、なかいちやミルハスといったエリア再開発や施設のリニューアルに加えて、秋田市が「芸術文化ゾーン」として提唱するエリアにおける、施設の集積による効果があると考えられる。

### 3 芸術文化ゾーンへの期待

秋田市の計画では、JR秋田駅西口周辺から、ぼぼろーど、仲小路(アトリオン南)を経てなかいちを経由し、通町・大町・川反へと至る広範なエリアが「中心市街地」として規定されている(図表2)。

とりわけ、「なかいち」を中心に千秋公園を含むエリアは、「芸術文化ゾーン」として、中心市街地の中核に位置付けられている。このエリアを含む秋田市まちなかには、秋田駅から徒歩15~20分圏内に、多くの芸術文化施設が密集している。

主な施設だけでも、秋田市立美術館(アトリオン)、秋田県立美術館(なかいち)、佐竹資料館(千秋公園)、ねぶり流し館(大町)、赤レン

ガ郷土館(大町)などがある。

施設ごとに個性的でユニークな展示があり、なかには全国的に著名なコレクションを有する施設もある。また、赤レンガ郷土館のように昭和期まで秋田銀行の本店として利用され、秋田市内に残る明治期の貴重な洋風建築として歴史的価値が高い施設もある。

実は、秋田市まちなかのようにターミナル駅周辺に美術館・博物館などの文化施設が集積している都市は、地方圏では珍しい。

東京であれば、東京駅や上野駅の周辺の徒歩圏内に多くの美術館や博物館が林立し、週末には企画展やコレクションを見るために、全国各地から観覧客が集まる。鑑賞の後には、周辺を散策、回遊しながら、ショッピングや食事を楽しむ人たちの姿を見ることができる。

しかし残念ながら秋田では、芸術文化施設の集積を賑わい創出の面で十分には活かしきれていない。これまでは、施設と施設、施設と地域が個々に活動している印象が強く、せっかくの集客をエリア全体で受け止めることができていないように感じる。

魅力的な展覧会、動員力のあるミルハスでのコンサートやなかいちでのイベントにより、まちなかに人が戻りつつあるなか、特定の施設やイベントの観覧で終わらせるのは、実にもった

図表2 秋田市の中心市街地のエリア



資料：秋田市中心市街地活性化プラン



いない。これからは、周辺の施設や周囲の商店・飲食店などと連携することで、まちなか全体へ賑わいを広げる仕掛けを考えていく必要がある。

そのためには、各施設が培ってきた歴史や物語をアピールするとともに、観覧者の回遊を促すために商店・飲食店などのビジネスサイドと連携したエリアづくりを展開することが重要である。

例えば東京駅周辺では、大手町・丸の内・有楽町地区が連携して「大丸有地区」というネーミングでエリアの一体化を目指している。民間事業者で組織する「大丸有まちづくり協議会」が中心となり、行政や公共交通機関と協働することで、ビジネス街としてのイメージを払拭して、賑わいのある街への転換を図ることが狙いだ（大丸有INDEX）。

これまでに、歩道でのイベント開催や、オープンカフェなど公共空間の積極的な利用、街路灯柱のフラッグ、街区案内のポスターなどの広告媒体などを活用して、一体感のあるまちの雰囲気を生み出すことに成功している。

このほか、周辺の美術館の集積を活かして、「アーティストがいる街」というコンセプトを打ち出し、ビジネス街とアーティストとの交流による「アートアーバニズム」を推進している。

中心エリアである丸の内地区では、年間で137日ものストリートイベントが開催されており、「丸の内イルミネーション」には102日間で644万人を集めるなどの成果が現れている。

#### 4 秋田市まちなか3.0

秋田市まちなかの中心エリアである「芸術文化ゾーン」においても、賑わいを生み出すための模索は始まっている。

旧秋田県立美術館をリニューアルした秋田市文化創造館には、こうした仕掛けづくりの中心

的な役割が期待されている。

文化創造館は、市民に「旧県美」の愛称で親しまれ、千秋公園の玄関口に立地するエリアの「顔」である。市民やアーティストに自由に活動ができる場を提供し、施設と施設、施設とまちなかをつなぐ「横串」となり、まちなかの賑わい創出に貢献してほしい。

さらに、2024年6月末にリニューアルオープンした秋田市立美術館「千秋美術館」は、魅力ある企画展を軸に誘客効果を発揮してほしい。加えて、7月から利用可能となった千秋公園大手門の堀遊歩道はユニークな存在となるだろう。これまでは、なかいち・広小路側から千秋公園とお堀を眺めてきたが、この遊歩道により、お堀の上（つまり水上）からまちなかを眺めることができるようになる。まちの眺めが一変することから、新しい「映えスポット」に、あるいは水上に浮かぶ新たな「聖地」になる可能性を秘めている。

各施設の機能拡充と協働により、まちなかでの滞在時間が延びることで、これまで以上にエリア内での消費拡大も期待できる。

これまで振り返ったように、「なかいち」を中心としたエリアの再開発【秋田市まちなか1.0】から、施設のリニューアルや機能強化といったハード整備【秋田市まちなか2.0】が一段落した。

市民の意識と行動は、コロナ禍を経て、ポスト・コロナの局面に移行している。これからの賑わい創出も、新しい局面を意識した取り組み【秋田市まちなか3.0】が求められている。

#### 参考文献・資料

秋田県「秋田県観光統計」

秋田市「秋田市中心市街地活性化プラン」

大丸有INDEX (<https://tokyo-omy.jp/>、閲覧日

2024年7月1日)